2025年1月11日　NANAWATA浅野友理子展トーク抄録

「はじまりの熱り」

ゲスト：大政愛（はじまりの美術館学芸員）

浅野　はじまりの美術館は2016年に初めて展示させてもらって、もう10年近く大政さんにお世話になっています。

大政　美術館のロゴは、「STARAT」に「ART」が隠れているデザインになっています。また、「はじまり」にはORIGINの意味合いもあります。はじまりの美術館は、2014年に福島県耶麻郡猪苗代町に、酒蔵だった建物を改修して開館しました。運営母体は主に知的・発達に障がいのある方の支援事業に取り組む社会福祉法人安積愛育園で、「人の表現を持つ力」や「人のつながりから生まれる豊かさ」を大切に考え、「様々な人が集える場所」ということを意識して開設しました。福祉とアートが同居するこの場所が、寛容で創造的な社会が開かれていくきっかけになることを目ざしています。本当は2011年に開館予定だったんですけど、東日本大震災もあり、地域のハブになるというコンセプトが加わりました。昨日は大雪で、美術館もかなり埋もれていました。

浅野　窓のところに……

大政　「雪囲い」という雪国の慣習があって、窓を押す雪の圧や、屋根から落ちる氷の塊で窓が割れたりしてしまうことがあって、それを防ぐために窓を板で覆うんです。はじまりの美術館が開館してすぐに、アーティストの方、地域の方とみんなで一緒に雪囲いを彩りました。また、毎年6月には、開館記念祭「はじまるしぇ」を行っています。展示室の特徴は靴を脱いで入ることです。夏になると気持ち良いので、素足になって展覧会を楽しむ方もいらっしゃいます。

浅野　凸凹しているんですよね。

大政　開館時には農作業が終わって長靴で来られる美術館というイメージもあったので、長靴で来た人も、おしゃれしてヒールで来た人も、みんなここで一度靴を脱いでフラットな状態で作品に出会えるような雰囲気もあります。ときどき、はじまりの美術館にちなんで、「初めて美術館にきました」というご家族もいます。美術館の最低限のルールは守りつつ、自由に過ごせる場所になっていて、お子さんもハイハイできます。企画展では、いわゆる障がいのある作家と現代アートの作家の作品を並列してご紹介することが多いです。浅野さんに出展いただいたのは、「たべるとくらす」という展覧会でした。年に5回くらい企画展があって、最近ではテーマにあわせて体験できる参加型の作品を展示しています。カフェスペースではワークショップをしたり、トークや音楽のイベントをしたりしています。カフェは無料で入れるエリアなので、地域の方と自然に出会える場所になっています。特徴的なのは「寄り合い」という活動です。開館前に地域のみなさんへお声がけをして、美術館ができることでどんなことをしていきたいか話し合うワークショップを行い、現在も地域とともに取り組むさまざまな活動を続けています。それから厚生労働省が一都道府県に一ヵ所ずつ障がいのある方の表現活動の相談、支援、研修などを行う支援センターを設置していて、福島県の支援センターは、はじまりの美術館になっています。

浅野　知らなかったです。

大政　なぜ「はじまり」の美術館なんですか、と聞かれるんですけど、表現や作品、人、出来事など、ここで何かに出会って、ここから「はじまる」ように、日常につながるきっかけができたらいいなという思いで名づけられています。

浅野　美術館に10年かかわって、改めて聞くと知らなかったことがたくさんありました。

大政　今日は浅野さんと一緒に、浅野さんと猪苗代での関わりや思い出を振り返ります。

浅野　2016年の「たべるとくらす」展の依頼をいただいたのは、宮城県の塩竃市の島でつくっている仙台白菜について描いた作品を知ってもらったことがきっかけですよね。

大政　チラシやWEBで作品を拝見したのですが、行きたいと思いながら実際には展示に行けませんでした。チラシで浅野さんの作品を見て、いつかご一緒したい、と思っていました。

浅野　今は塩竃の島の小学校に飾ってある絵なんです。それをきっかけに会津で昔から食べられている野菜についてリサーチをして、小菊かぼちゃを題材に描きました。

大政　会津伝統野菜と呼ばれる、いわゆる在来種なんですけど、上から見ると菊の文様みたいな形のかぼちゃなんです。

浅野　猪苗代湖の近くの畑で栽培されている農家に取材させてもらって。画面の上の方には軒下でかぼちゃを保存しているイメージを描いて、ちょうど農家に小さなお子さんがいたので、右側にはかぼちゃの茎の先に胎児みたいなシルエットを描いて栄養をもらっているイメージを描きました。この作品はいろんなところで展示させていただく機会があって、一時期は猪苗代の小学校にも教材のように展示されていました。そのときに、はじまりの美術館のみなさんも協力してくれて、展示を手伝ってくれたりして。この作品はまだ石膏地で下地をつくっていて、今は和紙を使っているんですけど……

大政　すごく重い（笑）。たぶん私たちふたりじゃ持てない。ふたつに分割されている絵ではあるんですけど、それでもめちゃくちゃ重いんです。《耕地の緒》という作品です。

浅野　そのときは余蒔きゅうりという伝統野菜も描きました。

大政　伝統野菜なので種を買うんじゃなく、種をつないでいくので、あえてきゅうりを種がとりやすくなるまで大きく育てるんです。浅野さんはそこからインスピレーションを得て。

浅野　ちょうど種取りの秋の時期におじゃましたので、こういう作品になりました。

大政　浅野さんのテーマには植物の循環があると思うんですけど、この頃から循環というキーワードはあったんですか。

浅野　植物を描く前から循環のイメージを表現したかったんですけど、植物を描きはじめてから、種を撒いて収穫してという循環のイメージが、必ずついてくるようになりました。

大政　また、2020年に浅野さんが猪苗代湖で取材をしている様子の写真も用意してきました。

浅野　ヒシの実をとっているところです。猪苗代湖はヒシが増えすぎて、底なし沼みたいになってしまうところがあるので、近くの小学校が取り組んでいるヒシ刈りにまぜてもらったんです。沈みかけて（笑）。ひとりで沈んだら、誰も助けに来なくて、鳥についばまれそうだったんですけど……

大政　猪苗代湖は本当に広いので、浜のように整備されているところもあれば、ヒシが広がっているところもありますね。

浅野　食べるとちょっと栗っぽい感じ。ヒシはいろんな形があるんですけど、結構、悪魔的な棘があるのもあって。

大政　角が四つくらいあるのもあります。

浅野　忍者が投げるような……

大政　まさにマキビシですよね。あとは最近、もともと地域おこし協力隊だった方が、ヒシを活用できないかと、お茶に加工して販売されていますね。浅野さんには、「ウォールアートフェスティバルふくしまin猪苗代」というプロジェクトにあわせて、統廃合の進む猪苗代町内の小学校で壁画制作をしていただいたんですよね。

浅野　ウォールアートフェスティバルでは、2回描かせてもらっていて、ヒシを描いたのは最初のときですね。

大政　《植物は巡る》というタイトルで、浅野さんの初壁画。

浅野　初壁画だったので、もっと描きたかったと、今は思っています（笑）。良い経験でした。もともと校長先生の部屋だったので、小さな空間でした。

大政　チャレンジルームという部屋でしたね。

浅野　体育館の前で、子どもたちが行き来して、距離感が近かった。ヒシの実の他にも、アサザという水がきれいなところに咲いている植物とか、サツマイモを描いて。小学校は芋掘りのプログラムが必ずあって、私の小学生のときもそうだったんですけど、初めて植物を育てる経験ができますよね。

大政　浅野さんの制作は、まず取材からですよね。
浅野　その土地の人に出会って、植物をきっかけにして。植物が気になっていろんな場所に行くこともあれば、先に場所があってそこで探していくこともあるんですけど。そこで教わりつつ、聞いた人の個人の物語とか、これは描いてみたいという部分が作品にとって重要。出会いがないと描けない。
大政　このときは、はじまりの美術館でも関連展示があって。
浅野　壁画になる前段階のドローイングとか、滞在中の日記みたいなものを一緒に展示しました。この頃は版画をはじめていて、いいタイミングだったので、刷り上がったヒシの版画と一緒に版木も展示して。
大政　ウォールアートフェスティバルは、地域の学校に作品が増えていくことも面白いんですけど、実行委員のスタッフたちがアーティストと親しくなって、会期が終わったあとに作品を買っていくんですよね。みんな普段ギャラリーに行くようなタイプじゃないけど、地域でつながりができて、それぞれの家だったり、ホテルや飲食店に作品が残っているのが、何十年後かに効いてくるんじゃないかな、と思っています。
浅野　2021年も、山間部の吾妻という地域の小学校で図工室に絵を描かせてもらって。そばに鉄分を含む川が流れていて、そこにある石を使って地元の方がナスを漬けたりしていて。
大政　最初の学校は割とフラットな面だったのが、図工室は備え付けの棚が多くて。
浅野　壁があんまりなくて。
大政　壁画だけど壁が少なく、空間全体に描かれています。
浅野　子安観音も描きました。はじまりの美術館の近くに実際にあって。結構良いですよね。
大政　隠れキリシタンの方がいた地域だそうで、殉難地の看板も立って残っていて。その名残でマリア観音が地域に残されているそうです。そういうことも気づいて、作品に取り入れてくださって。この壁画のタイトルは……
浅野　《脈》です。
大政　今まで枝葉や蔓で動きがあったのが、川のような大きな流れになって。ウォールアートプロジェクトは、今は猪苗代アートプロジェクトという名前で活動しているんですけど、実行委員長が長照寺というお寺の住職さんなんです。その住職さんも浅野さんの絵が素晴らしいと思って、お寺の襖絵を描いてほしい、と依頼して。
浅野　すごく見応えのある蓮をお持ちで、その蓮を描いたんです。
大政　実際には、蓮の花が咲いていたり、枯れていたりするのが同時にはないと思うんですけど、浅野さんの作品のなかだと、循環という意味で、いろんな蓮の表現が入ってくる。
浅野　絵だからこそできる。時間軸が重なっている作品。長照寺には、ありがたい言葉のガチャガチャがあるんです（笑）。奥さまが会津木綿の生地でつくられていて。毎回まわすんですけど、お勧めです（笑）。このときは襖になっている状態に直接描いていったので、緊張感があって。和紙もいつもと違う和紙を使っていて。奉納式もあって、良い体験でした。
大政　タイトルは《泥中の花》。金が全面に使われていて、すごくきらびやかな作品ですね。
浅野　花の部分は日本画の顔料で描いていて、緑の蓮の実は油絵具で描いているので、近寄ってみると、描き込みされたぞくっとする部分があって。
大政　事前に連絡すれば襖絵も見せていただけると思います。2024年の4月から6校あった猪苗代の小学校が統廃合で2校になって、浅野さんが壁画を描いた学校は、どちらも廃校になったんです。校舎は残っているんですけど、耐震の問題もあって最初の学校はおそらく再活用が難しい。毎年秋には、ウォールアートフェスティバルというかたちで、今まで猪苗代町内で描かれた壁画の特別公開や壁画を巡ることができるツアーを行っています。そして、NANAWATAさんの展示での新作のお話についてもお伺いできますか。
浅野　展覧会の前に、何かこの土地にかかわりのあるものはないですか、と聞いたら、サツマイモが飢饉のときに育てやすいものとして入ってきたと聞いて。ちょうど小学校で芋掘りをするタイミングで、そのお芋を使ったお菓子を小学生が考案してNANAWATAでつくるという話があったので。学校の許可をとって、芋掘りの授業を取材して。授業の一時間のなかで、一気に子どもたちが押し寄せるような感じで、本当に一瞬で芋の山ができて、子どもたちは去っていった（笑）。悩みながら《土の戯れ》というタイトルをつけたんですけど。飢饉や地域で積み上げてきた歴史も考えつつ、子どもたちの小さな手とか、シンプルな芋掘りの様子を作品にしました。
大政　浅野さんの作品は、大きな物語、大きな流れみたいなものと、リサーチのときにそこで起きた偶然の出会い、歴史には残らないかもしれない物語が一枚のなかに入っている作品が傾向として多いと思っていて。それが循環して命のつながりになっている感じがすてきですよね。
浅野　絵の右上の手の、もちもち感は気に入っています。
大政　今回展示している作品をご紹介ください。
浅野　山形の葛や、ハマナスの実、福島県柳津町の五畳敷芋、岩手の胡桃、青森のムラサキシメジといった、この一年に描いた作品を展示しています。
大政　今回の展覧会のタイトルに使われている「熱り」は、どういうイメージでつけたんですか。
浅野　収穫物の採りたてのイメージとか、出会った人たち自身から感じた熱とか、時の流れとか。「熱り」は少しネガティブな使い方もする言葉で、そこが面白いと思いました。思いついたとき、すぐにこれだと思いました。
会場からの質問１　普通は暗いはずの部分に金や銀の絵具を使っているように見えるのですが、油絵と日本画の絵具を両方使うときに大切にされていることはありますか？
浅野　日本画と油絵の絵具を両方使うのは、質感の違いのメリハリがあるから。エネルギーのある植物を描いているので、強い画面にしたいという意識があります。物質的な部分でもマチエールの表情の違いを出したい。油の上に水を乗せてはじく表情の面白さは意識して描いています。ギラギラしすぎないくらいの、ここというところに金や銀を乗せています。
会場からの質問２　どうやって農家の人との良い出会いができるか、心がけていることはありますか？
浅野　最初は民宿の人に紹介してもらっていました。最近は依頼を受けて、紹介していただいてつながっていく感じです。取材は一対一が良いです。大人数だとみんな緊張するので。学生のときは怖いものなしだったんですけど、最近は人の様子を見るようになってきたので、難しいですね。
会場からの質問３　石膏地を和紙に変えたきっかけは？
浅野　石膏地は油絵具を吸収するので描きやすかったんですけど、扱いがたいへんだったので、同じような質感の素材を探して、パネルにうす美濃という和紙を貼りこんで方解末を重ねて地をつくるようになりました。
会場からの質問４　浅野さんにとっての大政さん、大政さんにとっての浅野さんは、どういう存在ですか？
浅野　同世代なので、しゃべりやすい（笑）。ずっと成長を見てくれているキュレーターの方は限られているので、これからも一緒にやっていけたらいいなと思います。
大政　浅野さんはフットワークが軽くて、筆が早い。最初の依頼でも短い期間にすごく大切な作品を描いてくださって。なかなか同じ作家に仕事で何度もかかわれることが少ないんですけど、浅野さんはこれからも楽しみな作家です。私はお酒が飲めないんですけど、浅野さんはめちゃくちゃお酒が強くて、それで地域の方もみんな大好きになって……
浅野　飲み続けなければいけない（笑）。
大政　本当に柔軟に、一緒に場をつくっていってくださる方です。大好きで、大切なアーティストのお一人です。

（まとめ：岡村幸宣）